

## 古き時代の塵を求めて 全3話

川口幸宏

### 第1話 手記

霊廟パンテオンを出て左手にパリ 5 区区役所、右手にパリ第1大学（法学系）を目の端に留めながら、気持ちをせかせてリュクサンブール公園正面口に向かう。公園の前を走る道路はド・メディシス通り（rue de Médicis）である。正面口からド・メディシス通りに沿って右手に歩を進める。この通りの起点、すなわち1番が今回の旅の大きな目的先である。そこに「ボンヌフォア・リヴル・アンシアン」（Bonnefoi Livers Anciens）がある。日本語に直すと「誠意古書」となるか。これでもれっきとした固有名詞。パリに無数にある古書店の一つであるが、ここはフランス革命期の稀覯本が数多く埋もれている。稀覯本だけあって、いずれの本も目が飛び出るほど高価である。目が飛び出ようがフランス語がまだまだ未習得であろうが、ぼくはどうしても入手したい本がここにあることを4ヶ月前に確かめてあった。そのときにはほかに手持ちの金を他に回さざるを得なくて断念したのだった。今回の旅では何が何でもその本を入手したいと、パリ入りの翌日、まだ腰や尻が痛く、頭と目がしょぼしょぼの身体状態を抱え込んだまま、「誠意古書」なるお店にいそいそと向かったわけである。

ボンジュール。店のドアを開けながら挨拶をすると、一人のマダムと二人のムッシュとが挨拶を返してくれた。二人のムッシュのうちの若い方は前回、ぼくの本の探索内容を聞き出し、パソコンを駆使してその目的に適う本、すなわち、パリ・コミューン\*に関する当時資料に限りなく適う書籍や雑誌類、それとフランス革命期の教育改革に関する書籍の在庫を確かめ、目の前に並べてくれた人である。前回にも一人のマダムにお目にかかったが今回のマダムは違う人であった。今回は初めてお目にかかる年配のムッシュに資料探索のお力添えをいただくこととなった。

古書店は、日本風に数えると、6階建ての建物の一階をフロアにしている。高い天井まで

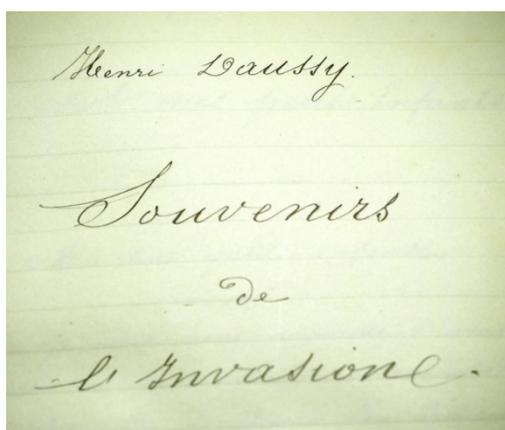
---

\* フランス語で la Commune (la Commune de Paris) と書けば、日本の歴史学で言う「パリ・コミューン」を指している。1871年にフランスの地方行政組織の最小単位であるコミューン(commune)で地方自治の自立を求めた革命運動があった。パリのコミューンはその中でも最大のものであり、フランス史の中でかなり重要な意味を持つ歴史事件である。一方、フランスで Paris commune と言えば、地方行政組織としてのパリのことを意味している。ラ・コミューン（「パリ・コミューン」）は la Commune は la Commune de Paris (en) 1871 と記述されることがある。1871という数字は、他の年代でもパリに大きな革命運動が起こり、やはり政府によって鎮圧されている、それらと区別するためである。ちなみに、なぜ我が国で「パリ・コミューン」と言われているのか、それについて未だ調査をしていない。

書棚がしつらえてある。求める本は梯子を使って一番上の棚にあったはずである。しかも前列と後列と二重になっていたのでフロアからは視覚で確かめることはできない。「この棚の一番上にあったパリ・コミュン関係の書物を見たいのですが。」と申し出たところ、年配のムッシュが指示をし、若いムッシュが梯子を掛け、登る。彼が登っていく先は前回の隣の書架である。ぼくは自分が目的としている書架の一番上を示し、ここのはずだが、と言うと、「場所を移動したので、ちょっと待って」との返答。若いムッシュが一番上の棚の前列の書物を全部取りだし、梯子を下りてきた。さあ、どうぞご覧ください、と案内をいただいた。梯子を登りながら胸をときめかせていた。さあ、あってください。そんな祈る気持ちである。

しかし、記憶にある書型、皮が張られた表紙は存在しなかった。やはり4ヶ月の空白は古書を同じところにはとどめ置くことはないのだ。そのままあきらめて梯子を下りようと思ったが、目的としたものはなくても、目の前に並ぶ10数冊はぼくがここ数年こだわってきている研究対象に関わる貴重な史資料ばかりのはずである。一冊一冊手にしてタイトルと内容と出版年を確かめる。もちろん売値がいくらかにも目をやる。要するに稀覯の度合いによって値が付けられているということだ。いくら欲しくても購入する金額総計には限度があるので\*\*、慎重に選ばなくてはならない。

数冊を書棚から出し梯子を下りて帳簿を預かる若いムッシュのところに持って行った。しかしどうしてもあきらめきれない心がある。「昨年11月に来たときあった手書きの本はありませんか？」若いムッシュはぼくのことを覚えているという返答の後、年配のムッシュに尋ねてくれた。年配のムッシュは、どこかにあるはずだ、と店内の書棚を探し始めた。さほどの時間を要することなくムッシュの手に、見覚えのある手作りの背革張りの黒い表紙本が運ばれてきた。ああ・・・これこれ。声を挙げて、まるで壊れ物を触るような感覚で、がっしりとあつらえられた表紙をめくる。



Henri Daussy Souvenirs de l'Invasion、  
『アンリ・ドッシー 侵略の思い出』というタイトルと著者名。フランス人から見たらどうなのだろう？ぼくの目にはきれいなフランス筆記体文字が厚手の罫線の入った紙に端正な姿をとどめている。内容はパリ・コミュン前のプロイセンによるパリ侵攻、パリ包囲、そして政変（第Ⅱ帝政の崩壊）が綴られている。国民遊動隊、国民衛兵隊などの文字が数多く登場するところからす

---

\*\* 「大佛次郎は『パリ燃ゆ』を執筆するに当たって、パリの古書店からパリ・コミュンに関するものをごっそり買っていったので、関係資料の値段が急騰したそうだとある知人から聞かされたことがある。ことの真意は不明だが、「ごっそり買う」というのは、気持ちとしてはすこぶる理解できるのである。

れば、筆者は一市民としてプロイセンとの戦いに義勇兵として参加したのだろう。ぼくの直接の研究対象からははずれるが、同時代に生きた一人の愛国者の生の姿を知ることができることに、胸がさらに躍った。

未知の、しかし極めて重要なオリジナル資料との出会い。それを異国の地に味わうことができるのもまた、古き時代への旅のおかげなのだろう。

## 第2話 幻の新聞

研究者にとって、オリジナル資料とコピー資料とを比べれば、天と地ほどの差異がある。パリ・コミューンを興味本位で追いかけて始めた頃には、たとえコピー版であろうともその時代の息吹を、真新しい紙と写真製版のためにすり減った活字に、心を躍らせていた。次第にパリ・コミューンに心を引き込んでいくようになる頃には、古本屋のムッシュがぼくの顔を見ると、店の奥から茶色に変質した本を数冊取り出して、にこやかにぼくの前に置いてくれるようになっていた。それらはほとんどが「幻の」という形容がつけられる先行研究書であったり当事者の証言記録であったりしていた。いずれにしてもそれらがパリ・コミューンの息吹を現代に伝えてくれる貴重な「証言」であることは間違いないわけだ。こうして収集したパリ・コミューン関係の史資料は、それらのコピー版あるいは再版ものを含めると、オフィスの6段書棚一架にはなる。それらをいつになったら読了し得るのか？という問いが発せられたら絶望的な気持ちにはなるけれども、そこは研究者の習性、前書きと目次と、索引とは必ず目を通してあるから、自分が何をどのように研究の視角を持つかという必要度に応じて書架からすぐに取り出すことができるほどには利用をしている。そして、必要な文献・資料を取り出すたびに、あるため息をついていた。それは、回想記録や研究書、調査報告そのものも貴重な当事資料ではあるけれども、いわゆる第一次資料には位置付かない。そして第一次資料に関しては、残念ながら、ほとんどがコピー版や再版本でしか入手していない。第一次資料というのは、後世の者がいっさい手を加えていない、当時の姿、事実をそのまま語るものである。パリ・コミューンに関して言えば、それが存在しているはずだと言われているパリ・コミューン議会議事録（これは1920年代以降に注釈や関連資料を添えたものが出版されている。これをクリティーク版と称するが、クリティーク版そのものがかなり入手困難となっている。近年写真複製版が出版された）、パリ・コミューン議会の広報紙（これは抜粋版コピーが出版されている）、パリ・コミューン議会関係あるいは国民衛兵隊中央委員会の広報ポスター（いわゆる壁新聞。これはまとまった形では目にすることはできない）が直接的な史料となる。議会議事録はクリティーク版を、広報誌はコピー版を、広報ポスターは10数点の実物を入手しており、さらにこのポスター類は当時を語るさまざまな史資料の中にも引用されているので、ほぼその全容を知るだけのものは我が手元にはある。議会議事録のオリジナルを入手するのは絶望的と考えられるが（手書き書のみ故）、広報紙やパリ・コミューン終焉直後に出された当事資料などに議事録が再録されているので、ほぼ完全な姿を確かめることができている。しかしなが

ら、広報紙にいたっては、コピー版だけが頼りとなっており、その実際の姿については、あれこれと推測するしかなかった。推測のあれこれというのは、先行研究書の中に写真で紹介されている広報紙があり、そのレイアウトはコピー版とはまったく異なるということ、従ってコピー版は何らかの手を加えた再編集版であろう、ということである。まさか記述内容に手を入れていることはあるまいが、それでも再編集版となると、歴史をそのまま対象化しそれを分析し、歴史的に位置づける（評価する）という作業にとっては、かなり信憑性に劣ると揶揄されても仕方ないわけである。

パリ・コミューン広報紙は **Journal Officiel de la République Française** というタイトルが付けられている。たった一号だけ例外的に **Journal Officiel de la Commune de Paris** というタイトルとなっている（写真下）。日本語に訳せば、前者は「フランス共和国広報紙」、後者は「パリ・コミューン広報紙」となる。この違いは、パリ・コミューンの本質の「謎」解きにとってじつに重要な意味を持つ。前者は、パリ・コミューン議会に対してヴェルサイユ政府と呼ばれた当時のフランス国民議会政府の広報紙と同一タイトルであり、もちろん



パリ・コミューンの間も発行されていた。つまり、**Journal Officiel de la République Française** はヴェルサイユ政府とパリ・コミューン議会とが同時期に出していた広報紙である。このタイトルを見る限りパリ・コミューン議会はヴェルサイユ政府に取って代わろうとしていた政治権力であろうと意識していたことが推測されるわけである。そして後者は、あくまでもパリという自治政体（コミューン）の独自の政治権力であることを意識していたことが推測されるわけである。

政治・行政のための広報紙は **l'Officiel** と略記されて各種記録・先行研究

などに残されているが、この略記だけの文字を追いかけていたのではこのような推測は成立し得ない。従って当事資料としてコピーなりオリジナルなりを入手し確認する作業は必須のことなのである。だが、前述したように、現在市販されているコピー版には何らかの再編集の手が加わっている可能性がある。だとすれば、やはりコピー版で確かめたことが本当はどうか、オリジナル版に遡る必要はどうしてもあったわけである。

パリ 5 区のモンジュ通りに小さいがこぎれいな古書店がある。この古書店は、一介の旅行者は入りにくい店構えとなっている。というのは、入り口ドアは常に施錠されており、呼び鈴ならぬ施錠解除のボタンを押してからでないとドアを開けることができない。通常古書店は「自由にお入りください」の言葉通りドアは簡単に開けることができるし、店の中に入って店主に挨拶なく書棚を眺め回していても何も声はかけられない。入手したい本が見つかりそれを手にとって店主のところに行き「サ、シルブプレ」と発声すれば後は請求されたお金を支払えばすむ。しかしこの店はドアに施錠されていることからして勝手に書棚を眺め回すわけにもいかず、きちんと所用を告げなければならない。

じつにこの日は、通訳を引き連れで、パリ市内をうろうろしている身にあった。

「ねえ、この店、気になるんだけど。中に入って本を確かめたいんだけど。」

ぼく的一声で通訳氏がドア横のボタンを押してドアを開けて中に入った。ぼくはその後をおずおずと従う。店のマダムと通訳氏がなにやら言葉を交わしているのを後ろで聞きながら書架の古書を一冊一冊目で追っていた。「この古書店は通信販売だけしか扱っていないそうです。カタログから必要な本を探してくださいとのことですよ。」と、第 33 号と印刷されたしゃれたカタログを渡してくれた。ページをめくっていると、古書一覧の中に **Journal Officiel de la République Française** が目にとまった。書籍解説にはオリジナル、完全揃いとある。動悸が激しくなるのを覚えた。まさしく、ぼくにとっては、「幻中の幻の史料」なのである。

「コピー版は持っているのですが、実物を見たことがないので、見せていただけますか？」その願いは、もちろん、すでに先客がついていなければ叶う。マダムはにこやかな笑みを浮かべて、書架ではなく、大きなボックスの蓋を開け、45×65 ほどの大きさの赤い表紙で製本されたものを取り出した。違うのである！コピー版とはまったく違う。コピー版の判型の 4 倍ほどに大きなオリジナル版。指先が震える思いで、おずおずと第一ページを開く。コピー版はオリジナル版にあるすべての情報は網羅していなかった！コピー版には書籍等の宣伝は掲載されていない。オリジナル版にはある。これが古書店での初見の印象であった。書籍等の出版情報も時代を知る上では重要であるが、より直接的な情報がコピー版で割愛されているとしたら、史料分析に欠陥が生じることになり、研究上重大な齟齬を来すことは間違いない。

意を決して買い求め、急ぎ足で宿に戻った。着替えもせず、ページを繰る。とんでもない発見をした。コピー版では完全に欠落しているヴェルサイユ政府の議会議事録概要が載せられているのだ。パリの人たちがヴェルサイユ軍の大砲を奪った（正確には奪回した）

のが1871年3月18日。この日をもっていわゆる「フランスにおける内乱」が勃発したとされている。そしてパリ・コミューンの議会議員選挙が広報されたのが3月20日、この時はまだパリ・コミューン議会は発足していないので選挙の管理はパリの国民衛兵隊中央委員会が行っている。選挙が行われたのが3月26日。3月29日に選挙結果を受けて第一回の議会が招集され、暫定権力であった国民衛兵隊中央委員会から行政権力の委譲を受け、パリ・コミューン議会は発足する。広報紙にはこの間の事情を物語る諸情報が載せられており、このことはコピー版でも間に合う。しかしながら、そうしたパリの動きをヴェルサイユ政府がどうとらえていたのか。それを直接知る史料としてはパリ・コミューン終焉後に出された回想記、研究書などを所蔵しているが、同時進行形の史料、たとえば議会議事録（概要を含む）については未見であった。ところがその議事録概要がオリジナル版に所収されていたのである！但しそれは4月3日までであり、それ以降はもっぱらパリ・コミューンの議会決定や議事録のみとなり、ヴェルサイユ情報は紙面から消えていく。このことの意味もかなり重要であるが詳細な検討は後日に移すことに決め、初めて見るヴェルサイユ政府議事録を拾い読みをして、その夜を過ごしたのである。

店の名前は **Libraire Hatchuel** (アチュエル書店)。インターネット上で注文をすることができることを教えられた。古書店は通常、古書目録で書籍注文に応じるが、その目録には、店の書架にある売価付き本が、ほとんど掲載されている。しかし、この店の書架に並んでいるものは、その売価はつけられていなかった。しかもカタログすなわち古書目録はほんの一握りのサンプルであり、実際にはインターネット上で通信販売されている。帰国したら、週に一度は、この店のアドレスを我がPCに入力する習慣となりそうである。

### 第3話 世界でただ一点の絵画

この日は違って急ぎ足であった。

宿へ向かっているはずの行き先をふと変更する心が起こってきた。パリ・コミューンに関する史資料の類はかなりの点数を収集したはずである。しかしながら、まだまだ未知の世界がある。その世界の探訪の旅に次回はいつ出ることができるのか不明である。もし可能性があるならばと、展示会を見た直後に特有の、直接手にとって時間の許す限りためつすがめつ確かめたい、という欲求が起こってくる。そのためには、ぼくの場合には、「自分の手元に置く」(図書館等からかり出すのではなく) ことの欲求となる。幸い日はまだ高い。このまま資料探索のパリ散歩へと移ろう。さて、どこへ行くか。今回の旅では行っていないクリニャンクールの蚤の市の古書店は、この日は扉を閉ざしている。フレネの「ゾッキ本」を置いていた古書店に可能性はないだろうか。もしパリ・コミューン関係がなかったとしても「ゾッキ本」の棚にはまだまだフランス教育史の「宝物」が眠っている可能性もありそうだ・・・。

トゥルノン通りをリュクサンブール宮殿正面に向かって足を速める。「ゾッキ本」のワゴンの中を丹念に探る。パリ・コミューン関係はなかったけれども、フランス教育史を学ぶ

にふさわしい古書が、やはり1ユーロ、2ユーロの値段が付けられて、眠っていた。数冊を選び出し、店内に入る。先日はにこやかに笑みを浮かべて優しげだったムッシュが、今日は難しい顔をしている。声をかけづらい雰囲気ではある。選び取った数冊をそのムッシュに渡しながらか、おずおずと、パリ・コミューン関係の資料はないか、と尋ねる。むすっとしたまま、先日は見たものの、目線が届かなかった棚から出して手渡してくれたのが、'Avant, Pendant et Après La Commune'（「パリ・コミューン 前・間・後」）という戯画集の複製版。1971年のパリ・コミューン100周年を記念して出版された「パリ・コミューン大歴史」（全5巻）の予約者に限って配布された限定出版ものである。この戯画集の原作者はPilotell（1845-1918）。パリ・コミューンのリーダーには芸術家の参加も少なくなかったが、彼もまたその一人である。ヴェルサイユ軍に捕らえられ、1874年の第3軍事裁判で死刑判決を受けるがその後減刑、ロンドンで死んでいる。反パリ・コミューン側から描かれた戯画は入手していたが、パリ・コミューンメンバーによる戯画を（たとえその複製といえども）まとまった形で手に取ってみるのは初めてである。裁判抜きで処刑された屍が重なる中で少年が処刑されようとしている場面はヴィクトル・ユゴーなどが詩で描いているところである。やはり深い感慨を覚えざるを得ない。

購入の意志を示すとムッシュが「パリ・コミューンに関わるオリジナルの絵画があるがそれは必要ないか。」と言う。リトグラフ、写真、新聞などは、オリジナルであったとしても、何枚も作成されている。しかしながら、絵画は、まさにその一枚だけがこの世に存在しているだけである。そのような貴重な歴史財産を、ぼくのようなわけ知らずの、駆け出しの、この先どのように進んでいくかその方向性さえ見えていない者が、いくら研究者とはいえ、所有していいものかどうか、逡巡する心が大きく働く。ぼく自身の歴史資料に関する「哲学」は、自分自身が現在行っていることはまさにそれと矛盾するものであり、公的所有、公開をモットーとしている。だから、ぼくは公人ではないが、ささやかなりとも、「公」に開くことができればと、求める人がいればいつでも資料を手にとって見ていただくようにと、これまでも心がけてきた。パリ・コミューンに関しては未だそのような人は現れないが、HPで情報を公開しているので、やがて目に留める人も出てくるだろうと思っている。

「見せていただけますか？」「ウイ」

目の前に出されたのは、グレーのクレヨンの主たる画具として描かれた、戦闘の後の、A4判ほどの大きさの絵。その色彩こそ、まさにパリ・コミューンでなされた死と破壊を象徴するものである。小高い丘を舞台にし、画面中央下に数々の屍。画面右半分には破壊された建築物。そして画面左は下り傾斜の丘、その傾斜には大砲などの兵器。左半分中央は破壊されつつある街の遠景であろう、炎と煙が高く上がっている。そして天空には月。絵の作者はAlbert ROBIDA（1848-1926）。彼は、戯画、リトグラフなども描き、ジャーナリズムで活躍した。主として「戦争」を描くのが彼の手法であり、また哲学である。彼の名前は知っているという程度であり、どれが彼の絵なのかを識別するほどには知らない。



やはり「実物」の持つ迫力に圧倒される。黒と白の世界だけで、あらゆる色を持つこの人間の世界を描ききるその筆力に、パリ・コミューンの一つの「真実」を教えられた思いである。

店の名は *La Poussière du Temps*。日本語に直せば「時々の塵」。古本の本質を言い得た店名である。そして「塵も積もれば山となる」。この山は歴史の宝の山である。「自宅の書庫のどこかに、パリ・コミューンの時の写真があるので、探しておきます。見つかり次第、連絡を差し上げます。」と、ぼくのその先の心を読んだ別れのご挨拶をいただいた。

こうして、ぼくのフランス旅の贅沢が満たされたわけだ。とくに今回は贅沢以上の贅沢と言えよう。が、出ていった金額を考えると、後の日常生活は相当節約しなければならない覚悟がいった。飲む・打つ・買うをしないぼくとしてはこの贅沢によってする節約は心の健康保持にとっては非常に有益なものであると確信する次第である。